竹千代賞

森の神様

辻　日菜子

「最近どうもおかしなことが起こる。」

リスはため息をつきました。ころころとした木の実のなる木は、根が腐って倒れてしまいました。甘い香りの花畑は、なにかに食い荒らされてもう残っていないのです。空を映す鏡のように見えた池は、晴れの日もひどく濁っています。他のみんなも困っている様子なので、みんなでフクロウに相談しに行くことにしました。

「フクロウさん、どうしてこんなことになっているのか知ってる？」

「勿論知っているさ。」

「じゃあどうして元に戻さないの？」

キツネが苛立ったように聞きました。悪いのは気付いているのに何もしないフクロウだとでも言いたいようです。

「私だけでは戻せないのさ。」

無口なフクロウはそれだけを口にすると、木の洞へと戻っていこうとしました。

「ちょっと、フクロウさん！」
「今日の夜、月が出る頃になったら、もう一度ここへおいで。ああ、眠い。」
フクロウはそう言うと、今度こそ洞の中に入ってしまいました。
みんなは、顔を見合わせてから走って自分の住処へと帰りました。月が出てから集まるためには、今のうちにお昼寝をしておかなければいけませんから。
橙色の太陽が沈み、青白い月が昇ってきました。細い細い月でした。木の洞の周りに、お昼にいた全員が集まっています。中には眠そうに目をこすっている動物もいましたが、フクロウが出てくるとピンと背筋を伸ばしました。
「おはよう。ではこれから、あの木のところへ行こうじゃないか。」
「えー！　あの木まで？」
あの木、と言えばこの森の仲間たちはみんな同じ木を思い浮かべます。森の奥のさらに奥にある、大きな大きな木なのです。フクロウはさっさとあの木の方向へ飛んでいってしまいました。残された動物たちは困りましたが、周りをホタルが囲みました。
「あの木まで行くんでしょ？　僕たちが照らしてあげるよ！」
そうして、動物たちは互いに手を繋いで、ホタルについて歩きました。不安定な道でしたが、ホタルのおかげでみんな無事に歩いていくことができました。
「着いた！　ホタルさん、ありがとう。」
「どういたしまして！　森を元に戻してくれるんだよね、頑張って！」
そう言うと、ホタルはさっと帰っていきました。
「おーい、ここだよ。」
暗闇の中で、フクロウの目が光っています。みんながそちらへ近づくと、そこには神様を祀る小さな祠があ

りました。
「神様のお家じゃない。これがどうしたって言うの？」
ウサギがそう聞くと、リスはハッと気がつきました。
「お供え物が無い！」
花瓶には数本花が刺さっていましたが、以前は山積みになっていた、お団子が置いてあった場所には、落ち葉が重なっているだけでした。
「ま、まさか、お供えがなくて、怒った神様の祟りだって言うのか？」
怖い話が苦手なクマが震えると、フクロウは、
「とんでもない。」
と首を横に振りました。
「神様は今までこの森を守ってくださっていた。そして、今もそうだ。けれど、神様へ感謝する動物が減って力が弱くなってしまったのだ。」
「嘘だ！　だって僕たちはいつも神様に感謝してるよ！」
そう怒ったのはタヌキです。
「この葉っぱだって、綺麗なのを選んで神様にお供えしたんだい！」
フクロウは優しく微笑みましたが、また首を横に振りました。
「私たちは確かに神様に感謝している。けれど、昔と今では森にいる動物の数が変わってしまったのだよ。」
動物たちは黙り込んでしまいました。年ごとに、森だった部分は住宅街へと変わっていき、どの動物たちも減っていっているのです。
「…それじゃあ、どうすればいいのさ。僕たちはもう、何もできないの？」
キツネが今にも泣き出しそうな顔でフクロウに尋ねました。

「いや、そんなことはない。私たちの他にも、感謝する動物が増えればいいのだよ。」
フクロウはそう言うと、みんなにすてきな計画を話しました。みんな、真剣に聞いて、早速取り掛かろうとしましたが、フクロウはそれを止めました。
「待ちなさい。今日はもう遅いし、みんなは眠いことだろう。それに、明日は新月だ。」
「どういうこと？」
「何かを始めるなら新月の時の方がいいんだよ。だんだん満ちていくからね。」
そう言うと、フクロウはみんなを家まで送り届けてくれました。みんなは、神様のことを考えて緊張していましたが、疲れが出てすぐに眠ってしまいました。
その夜、みんなは夢を見ました。何かが泣いているのです。枯れた花を見て、倒れた木を見て、それを見て悲しむみんなを見て、とても小さな声で泣いているのです。その声は、まるで雨の音のように、みんなを包み込んでいました。
次の日の昼、みんなは、とある木のところへと駆けていきました。
「あらあら、みんな揃ってどうしたの？　遊びに来たのかしら？」
その木は、名前をクルカスと言いました。
「クルカスさんにお願いがあるんだ。少しだけ…樹液をもらいたいの。傷つけてしまうのは申し訳ないけど。」
「フクロウさんから聞いたわよ。私たち植物は動けないけれど、あなたたちと同じようにこの森に守られているわ。だから、遠慮なくとは言えないけれど、協力させてちょうだい。」
みんなはお礼を言ってから、クルカスたちの茎を折って、樹液を集めました。クルカスは痛そうな顔は見せませんでした。動物たちの方が痛いような顔をしていました。動物たちは、絶対に成功させようと改めて思いました。
夕方になって、みんなは葦を探しに行きました。葦という植物は、軽くて中身が空なのです。

「いたよー！」
一番に見つけたのはウサギでした。みんなはそこに集まって、葦に話しかけました。
「ねえ葦さん、もちろん根っこは残すから、茎を少しだけ折らせてくれない？」
「いいんじゃよ、昨夜フクロウに話を聞いたし、アッシらもちゃんと考えておるからのお。」
みんなはお礼を言って、出来るだけ先の方から茎を摘み取りました。
夜になって、みんなはフクロウのいる木に集まりました。みんなの手には、クルカスの樹液を集めた葉っぱと、葦の茎がありました。
「ご苦労様。私が最後に準備をしておくから、みんなは明日に備えてくれ。明日の朝、太陽が出てしばらくしたら始めるからね。」
みんなは元気よく返事をして、明日のために帰っていきました。みんな目が覚めてしまって仕方がなかったのですが、はやる気持ちを抑えながらやっとで眠りにつきました。うんと疲れていたせいか、夢は見ませんでした。朝早く、みんなはフクロウのいる木の周りに集まりました。太陽が出る前からソワソワしていた動物も、少なくありませんでした。約束の時間になって、フクロウが出てきました。フクロウは全員分の葦の茎と、小分けにしたクルカスの樹液を配りました。
「いいかい？　ちゃんと気持ちを込めて吹くんだよ。そうしないとすぐに割れてしまうからね。」
そうフクロウが言うのをしっかりと聞いてから、みんなは駆けていきました。そして、森の外側を向いて、クルカスの樹液を葦の茎の先端に付けてから、それをそっと吹きました。透明な膜が膨らんで、虹色を含んだ柔らかい宝石のような球体になりました。いくつもの球体が生まれて、ふわふわと森の外へ飛んでいきました。みんなが球体を飛ばすのを見て、リスはやっと決心したように、葦の茎を口へ含み、そうっと吹きました。リスの頭の中は、神様の祠、花畑、泉、そしてみんなのことでいっぱいでした。その胸いっぱいの気持ちを葦へ吹き込みました。その気持ちは立派な球体になって、ふわふわと森の外の空へ飛んでいきました。

「学校行きたくないなあ。」

帽子を被った男の子がランドセルの肩紐を握りしめてつぶやきました。忘れ物があったかなあ、今日は算数があるなあ、なんて考えながら、足元にある小さな石を蹴飛ばしながら歩いていると、ふわり、と目の前にシャボン玉が現れました。男の子はほとんど何も考えずにそのシャボン玉を割りました。ぱち、と小さな音が鳴ってシャボン玉は虹色の霧になって消えました。すると、男の子は何だか居ても立っても居られない気持ちになりました。見上げた先には、いつも見ているはずの森がありました。そして男の子は今日ここに入らなくちゃいけない、シャボン玉が呼んでいる、という気持ちになりました。走って山に入ると、少し暗くてなんだか怖かったのですが、前に人が歩いていることに気がついてまた走り出しました。ずっと前にいた人に追いついたのは、大きな木の下でした。そしてその人は不思議そうに振り返って聞きました。

「君はここの神様を知ってるの？」

男の子はびっくりして、すこしうわずった声で答えました。

「ううん。知らない。」

男の子はなんだか恥ずかしくて、周りを飛んでいたシャボン玉を指で突いて割りました。

「私もシャボン玉に呼ばれた気がしたんだ。」

大人がまじめにそんなことを言うものですから、男の子はくすりと笑いました。それを見たその人も笑って、

「せっかく来たからさ。」

と、カバンから袋に入ったお菓子を取り出して小さな祠に置きました。男の子も、ランドセルの中をごそごそと探って、お弁当のデザートのみかんを取り出しました。そしてそれをお菓子の横に置くと、ちょうど鐘の音が聞こえました。

「あ！　学校！」

男の子は走って山から出ました。それを見ていたその人は、少し笑って自分も山から出て仕事へと向かいました。

次の日、男の子は学校へと歩いていました。またランドセルの肩紐を握りしめて。けれど、何かを探すように周りを見ていました。そしてその何かはすぐに飛んできました。

「あっ。」

シャボン玉を見つけた男の子は、またぱちんと割りました。

「ありがとう。」

耳元で声がした気がして振り返りましたが、そこには誰もいませんでした。けれど声はまだ聞こえています。いろいろな音色で、みんな優しい声で、ありがとう、と聞こえていました。男の子は胸いっぱいに「ありがとう」を吸い込んで、一歩ずつ歩き始めました。